第２　教育研究団体の意見・評価

○　日本国語教育学会

（代表者　桑原　隆　　会員数　約2,900人）
ＴＥＬ　03-6801-5951

１　前　　文

⑴　現代文分野

第一問の問題文について，去年とは異なり，身近な題材だったことが評価できる。一方，特に後半の文章などは好みの分かれるところで，もっと一般的な内容の文章でも良かったように思われる。また断定を避ける言い回しが多いなど，題材文の論理性が弱いことも課題として挙げられる。第２問は解答に手間のかかる問題であった。語彙の問題がないことが気になるが，小説の内容は面白い。注が少なく，比較的新しい文章であったことも特徴的であった。

⑵　古典分野

古文より漢文の方が解きやすかった。古典全体ではバランスは取れていたが，古文は難化したと思われる。共通テストの出題傾向と，国公立大学の２次試験が乖離してしまうと対策がしにくくならないか。

２　試験問題の程度・設問数・配点・形式

第１問　量の多い文章を構成に注意して読み込むというよりも，全体趣旨をつかむ力が求められる問題であり，コンテンツの読み込みではなくコンピテンシーを問う形へシフトしたことが明瞭になった。２つの文章の共通するテーマが見えやすいため解きやすくはあったが，実際受験生にどのくらい負担感があったかはわからない。

問１　(ⅱ)が新傾向。特に(ｵ)は漢文に通じる「字義に現れる漢字」を問う問題で，国語総合の学習内容を活かせる良問。ただ問題の蓄積に限界があり，この傾向が何年続くのか疑問。(ⅰ)も，同音異義語・同訓異義語など幅広い漢字指導が問われる良問。

問２　選択肢の抽象度と具体度の差がかなり大きいのが気になるが，選択肢同士の比較はしやすい問題であった。傍線部の前後だけを読んで解こうとする生徒は解きにくいので，そういう意味では構成を考えさせる問題であると言え，良かったのではないか。ただ傍線Ｂの解答と重なる部分があるのが気になった。

問３　問２の問題文を抽象化したのが問３なので，同じような答えになってしまう。文章量から考えると他に聞くところがなかったのだろうとは思うが，もう少し聞く場所を変えられると良かった。誤答④「罪深さ」⑤「身勝手さに絶望」といった文末の表現は，正答に近くなってしまうのではないかという意見が出た。一方で，賢治の小説においては「罪深さ」が読み取れるかもしれないが，評論の論者は「それがよいかどうかわからない」というところまでしか解釈していないため，「罪深さ」は誤答として妥当だという意見も出た。文章が入れ子構造になっており，文章そのものを精読するより，出題者の意図に沿って「読まされている」という印象が強い。また，選択肢に同じような言葉が繰り返し出てくるなど，やや無理が生じているので，選択肢を５つにこだわらず４つまで減らしても良いのではないか。

問４　傍線部前の２段落を比較すれば解ける問題。選択肢の抽象度がバラバラで，良くも悪くも答えを見つけやすい。問題を解くために参照する箇所が少ないので，全体を読んで解くような

問題があっても良いのではないか。ただそうすると傍線部Dに重なってしまうだろうと思うので難しい。以前のセンター試験なら傍線なしで聞いていたような問題だった。

問５　内容は問題なし。センターの歴史の中でも解きにくい問題。表現的な問題は問うべき問題なのか疑問。予備校では「捨て問」扱いにされることがある。従来は表現と構成の問題だったが，今回は表現だけ。❹の「軽妙」が引っかかる。本文の表現について，客観的にどの程度捉えられるのか，もう少し練る必要がある。

問６　(i)まぎれなく解けるが,何度も同じことを聞かれている印象。「食べることの捉え方の違い」というノートの文言をヒントに解く問題。今後もこの傾向が続くと本文中に傍線は引けないだろうと思う。出題者の意図としては，学習の振り返りとして問題を解かせたいということなのか。(ii)正答「生きることの衝動」まで言えるのかという意見が出た。本文によれば個体が環境維持を意識しているわけではないので，そう考えると個々が生きる衝動を持っていると捉えるしかないのだろうが，よだかが「生きることの意味を見出せない」ことと矛盾してしまうのではないか。

第２問　本文以外にも俳句や歳時記など様々な要素に思考を飛ばさなければならず，読み辛さを感じた。登場人物「私」は感情の起伏が激しいため，感情の変化を丁寧に読ませる文章であった。

問１　冷静に読ませる問題。最後ではなく，最初に文章を広く読ませるという新傾向。

問２　難しくはないが丁寧に読めば解ける問題。正答に「少年の若さ」の要素がもう少し入っている必要があるのでは。傍線部の「身体の底を」をそのまま言い換えた選択肢の「根底から否定」という表現は，あからさまに答えがわかるので，言い回しを変えた方が良い。珍しい訂正。訂正について試験会場では実際にどのような対応がなされたのか。

問３　全体を読まなければ解けない問題。問うべき箇所であるし，選択肢の内容も良い。「私」の心情を問う問題が連続するため,「少年」の心情などは問えなかったのか疑問。もう少しリード文で方向付けをしたり，言葉の定義付けなどを加えたりするなど，工夫できないか。

問４　(i)「私」の心情を劇的に読んでいるのが正答だが，会社勤めを引退した主人公が，果たしてそこまで大きな感情をもっていたと読み取れるのか疑問。❸の「侮る」は紛らわしい。「つねに」抱いていた感情なのか，というところで読みが分かれた。(ii)「何が書かれているか」よりも「どのように書かれているか」を重視する問題を今後も大事にしてほしい。

問５　問題が唐突に見えるが面白い。実際の学校現場で生徒が自主的に取り組めばきちんとした探究活動になる。「学びに向かう姿勢」を再現した問いだと思うが，学びを「深める」問いになっていたかと言われると疑問。ノートは本文のサブテキストなのか，それともメインテキストの一つとして重視されるべきものなのか，位置づけがわからない。韻文と散文を組み合わせるという問題で，国語総合的な問題だが，問題自体が簡単。工夫された問いなだけに，難易度のバランスが難しい。特に（ｉ）については，どれだけ問う価値があるのか疑問。いくら問題が工夫されていても，短い時間のなかで相当の分量が出されている。本当に受験生はじっくり読めているか。

第３問　文章ⅠとⅡを比較して読むことに関して，内容面では優れていたが２０分という時間で解けるかというと文章量も多く難しい。また出典も気になった。リード文の「親しく仕える」だけで設定を説明しきれるか疑問。比べ読みという形は今後定着していくと思われるが，古典を学ぶ意義の再認識につながるかと言われると正直難しい。

問１　(ア)(イ)(ウ)の３問のバランスが良い出題となっており妥当。(ウ)は現代語の知識を利用しつつ広げる問題となっていた。

問２　従来現代語訳だったものの変化形として新傾向だが妥当。文法を解釈に応用させ，文脈を

押さえて問う問題。こういう方向性で，この位置で定着させていっても良いのでは。

問３　設問内で「院の言動について」と主語を明確にしており，親切に作られている。直前の会話文内容の要旨や基礎的な語彙力を知識として使っており，妥当。

問４　生徒と教員のやりとりという形式の出題もあって悪いわけではないが，毎年のスタンダードにしてほしくはない。㈢は文学史的な知識を使って答えるとすると，国語総合の範囲は超えている。ただしっかりと勉強してきた受験生は点数に結びつく。

第４問　比べ読みというよりは一連のものであり，目新しさはなくある種のスタンダードと言える。

問１　基本的な語彙を聞く問題としては妥当だが，古文と漢文の求める学力の方向性が違うということは解消されていない。

問２　白文に上下点まで施すという点で難易度が高い。この難易度でのこのような形式の出題は相応しくないと思われる。再考してほしい。

問３　上記問２と関連して，この問題では送り仮名は付けられていないが語順は決まっており，このあたりが限度かと思われる。

問４　漢詩の基本的な知識を問う問題。知識ベースだが，漢詩を出題する以上はどこかで出したい問題。

問５　国語総合としては難しいが，古典Ｂを勉強している受験生には基本的な句法を問うレベルとして妥当。

問６　しっかりと読めていれば普通に解ける良問。

問７　全体から読み取れるものであり，正答に紛れはなく妥当。